

埼玉県立近代美術館収蔵美術品展

Ei-Kyu / Ai-O / Ikeda-Masuo

—現代版画の一系譜—

瑛九

雲嵒

池田満寿夫

平成12年 10月7日(土)から
11月26日(日)まで

ギャラリー・トーク

平成12年10月22日(日)午後2時から

解説者 埼玉県立近代美術館 企画課長 大久保静雄 氏

開館時間 午前9時から午後5時まで

休館日 10/9を除く月曜日・10/10・27・11/24

入館料 一般 150円 高校生・大学生 100円 小学生・中学生 50円

※第2・第4の土曜日は小・中学生は無料です。

主催／狭山市立博物館・埼玉県立近代美術館

会場／狭山市立博物館

住所 〒350-1324 埼玉県狭山市稻荷山1-23-1 稲荷山公園内 R270
TEL 042-955-3804 FAX 042-955-3811

開催にあたって

日本の現代版画界は、世界的にもその実力を認められており、多くの作家がさまざまな手法を駆使して、国際賞を多数受賞しています。この源流は浮世絵に代表されるように、芸術的にも技術的にも世界で認められ、さらに西洋版画の技法の流入によって、より高度な芸術性を生み出し現在にいたっています。

今回は埼玉県立近代美術館の収蔵品のなかから瑛九・戸塚・池田満寿夫の作品をとりあげ、現代版画の一系譜をたどります。狭山市では、池田満寿夫の陶壁画「自然と都市 狹山」を市庁舎1階エントランスホールに設置していることから、彼の作品群とともに、昭和の初頭より美術界に新風を巻き起こし、指導的立場であった瑛九と、池田に彼を紹介した戸塚の作品群を展示し、池田と彼に影響を与えた二人をともに紹介することで、現代版画の一潮流についての理解がいっそう深まることと思います。

内容の充実した芸術系企画展は東京都内で開催される例が多いなかで、質の高い美術品を鑑賞するよい機会となりますよう、多数の皆様方にご観覧いただければ幸いと存じます。

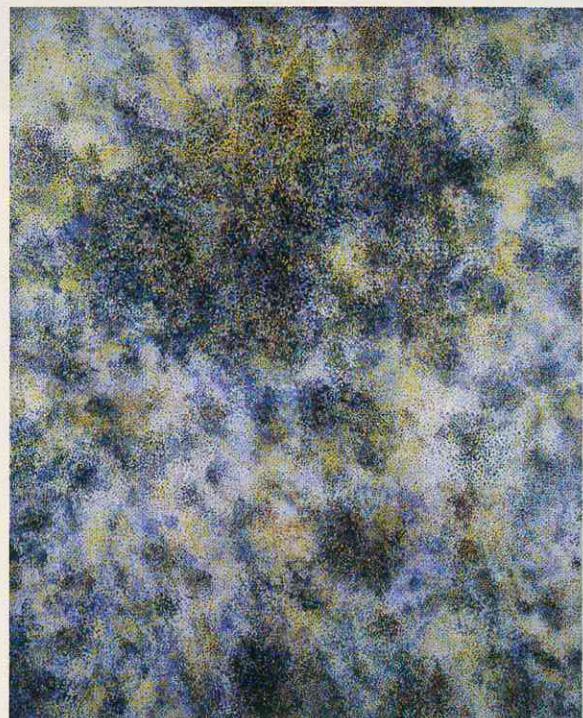
最後になりましたが、本企画展の開催にあたり、ご協力いただきました方々に厚くお礼申し上げます。

平成12年10月

狹山市立博物館
埼玉県立近代美術館

瑛九(Ei-Kyu;1911-1960)

雲 1959 油彩・キャンヴァス 162.2×130.3cm



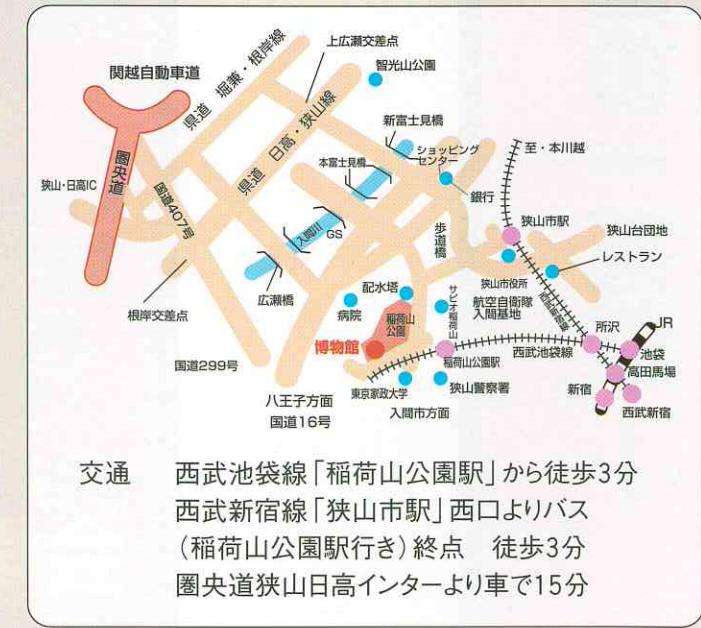
戸塚(Ai-O;1931-)

角力 1984 セリグラフ 40.0×82.5cm



池田満寿夫(Ikeda-Masuo;1934-1997)

ヴィナス 1975 メゾチント 29.6×39.9cm



交通 西武池袋線「福岡山公園駅」から徒歩3分
西武新宿線「狹山市駅」西口よりバス
(福岡山公園駅行き)終点 徒歩3分
圏央道狭山日高インターより車で15分

埼玉県立近代美術館収蔵美術品展

Ei-Kyu / Ai-O / Ikeda-Masuo

—現代版画の一系譜—

瑛九

愛嵒

池田満寿夫

平成12年 10月7日(土)から
11月26日(日)まで

主催／狭山市立博物館・埼玉県立近代美術館

会場／狭山市立博物館

開催にあたって

日本の現代版画界は、世界的にもその実力を認められており、多くの作家がさまざまな手法を駆使して、国際賞を多数受賞しています。この源流は浮世絵に代表されるように、芸術的にも技術的にも世界で認められ、さらに西洋版画の技法の流入によって、より高度な芸術性を生み出し現在にいたっています。

今回は埼玉県立近代美術館の収蔵品のなかから瑛九・鶴嶽・池田満寿夫の作品をとりあげ、現代版画の一系譜をたどります。狭山市では、池田満寿夫の陶壁画「自然と都市 狹山」を市庁舎1階エントランスホールに設置していることから、彼の作品群とともに、昭和の初頭より美術界に新風を巻き起こし、指導的立場であった瑛九と、池田に彼を紹介した鶴嶽の作品群を展示し、池田と彼に影響を与えた二人をともに紹介することで、現代版画の一潮流についての理解がいっそう深まることと思います。

内容の充実した芸術系企画展は東京都内で開催される例が多いなかで、質の高い美術品を鑑賞するよい機会となりますよう、多数の皆様方にご観覧いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、本企画展の開催にあたり、ご協力いただきました方々に厚くお礼申し上げます。

平成12年10月

狹山市立博物館
埼玉県立近代美術館

参考文献

- 『瑛九とその周辺』 埼玉県立近代美術館 1986
- 『埼玉県立近代美術館収蔵作品抄』 埼玉県立近代美術館 1987
- 『埼玉県立近代美術館コレクション選100』 埼玉県立近代美術館 1996
- 『デモクラート 1951~1957—開放された戦後美術—』 埼玉県立近代美術館他 1999
- 『浦和の画家とその時代—寺内萬治郎・瑛九・高田誠を中心に—』 うらわ美術館 2000

三人の活動について

三人の共通の活動拠点となったのは、1951(昭和26)年瑛九が同志と結成したデモクラート美術家協会です。この会は1957(昭和32)年に解散するまで、瑛九が理論的指導者としての役割を果たしました。「デモクラート」とは瑛九が興味を示していた万国共通語エスペラントの「デモクラシー」(民主主義者)に由来するものです。この言葉からもわかるように、その設立理念は、独立と自由な精神による「創造」を芸術として認め、まただれでもこの芸術活動に民主的に参加できるよう格付けと審査を廃し、また既成の公募団体に作品を出品しないというものでした。当初は8人の同志によってこの会が組織されましたが、後から参加した作家の中に、靉嘔と池田満寿夫がいました。大学在学中からこの協会にかかわっていた靉嘔は、1955(昭和30)年当時浦和市に住んでいた瑛九に池田を会わせました。池田は高校卒業後画家を志して上京していましたが、靉嘔を通じて瑛九に会い、その勧めで銅版画を始めて、1956(昭和31)年にデモクラート美術家協会の会員となりました。こうして瑛九の指導のもと靉嘔と池田は、制作に専念するわけですが、会員も28名を数えた1957(昭和32)年デモクラート美術家協会は解散し、三人はそれぞれ独自の活動を進めています。

こののち主に国内の活動を中心とした瑛九は、芸術の教育・普及に傾注し、「創造美育協会」を支援したり、美術界の活性化を目

的とした「よい絵を安く売る会」、版画の普及を目的とした「版画友の会」、小品に限らず3点以上の美術品を持った人を増やして多くの美術に関心を持たせようとした「小コレクターの会」などユニークな発想を持った美術団体を発足させてきました。一方靉嘔と池田は国際舞台での高い作品評価を受け、日本の現代版画の世界的地位を高めていきました。

なお埼玉県立近代美術館では、県内に在住あるいは拠点活動している作家の作品・関連資料を精力的に収集しており、浦和に住んでいた瑛九もそのひとりとして挙げられます。加えて、瑛九の活動の関連性を知る上で、デモクラート美術家協会に参加した作家である靉嘔、池田満寿夫を始め、磯部行久、泉茂、河原温、利根山光人、細江英公、吉原英雄、オノサト・トシノブらの作品の収集、また作品技法の関連性から、マン・レイ、モホリ＝ナジ、などのフォトグラム作品群の収集などは、美術館界でも評価が高く、特に前者では、昭和61年度企画展「瑛九とその周辺」、平成11年度企画展「デモクラート1951～1957」、後者では、平成9年度企画展「光の化石—瑛九とフォトグラムの世界—」などにより成果を挙げています。また、こうした収集資料の中には、瑛九とともに創造美育協会を結成した久保貞次郎による一括資料や杉田都の一括資料などの寄贈作品が作家の芸術意識を包括的に知る貴重な手掛かりとなっています。

Ei-Kyu

(1911-1960)

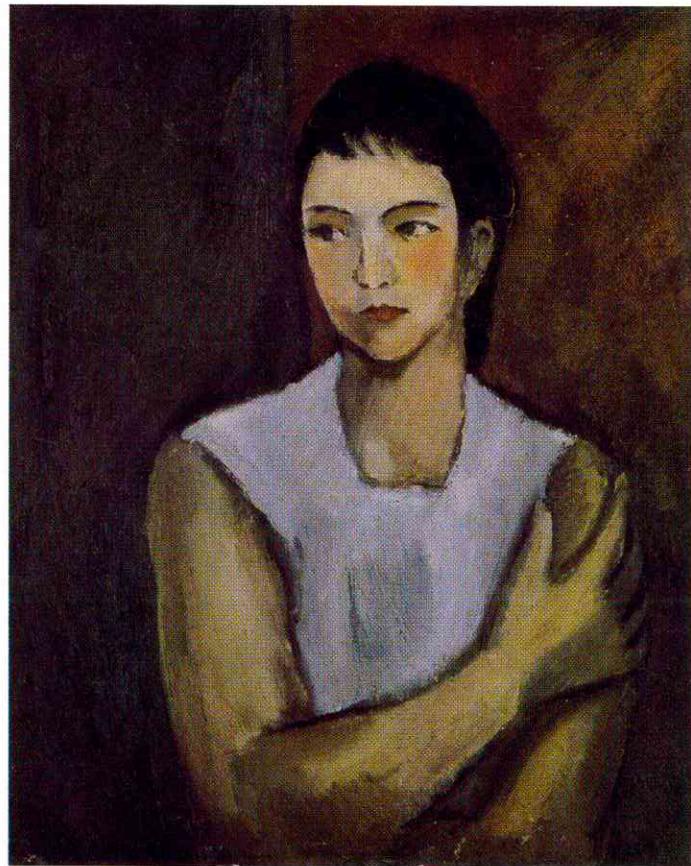
瑛九

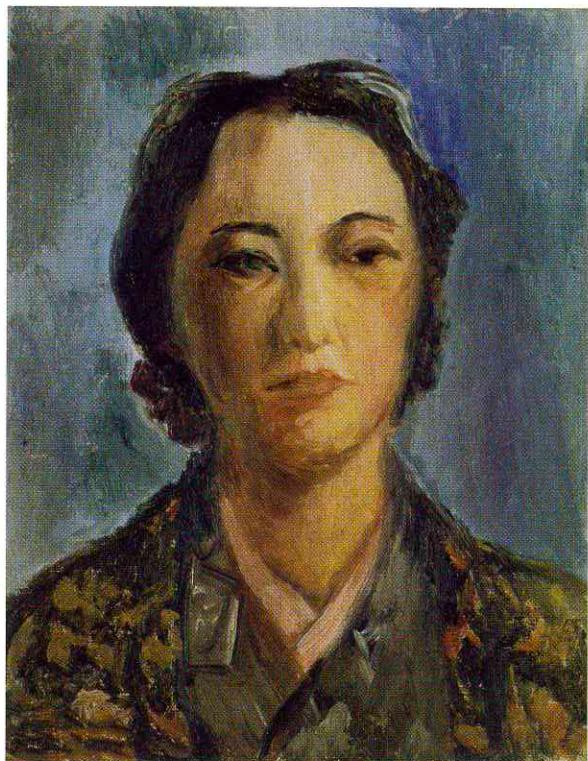
宮崎市に生まれる。本名杉田秀夫。日本美術学校洋画科で油彩画を、オリエンタル写真学校で写真技法を学ぶ。10代から写真や評論活動を行い、1936(昭和11)年新時代洋画展の同人となり、フォト・デザイン展を開き、翌年自由美術家協会の創立に参加。第二次世界大戦後、1951(昭和26)年同志とデモクラート美術家協会を結成したほか、翌年久保貞次郎らと創造美育協会を結成した。油彩画のみならず、エッチング・リトグラフなどを制作し、1957(昭和32)年の第一回東京国際版画ビエンナーレ展に招待出品。生涯を通じて、精力的に美術制作と執筆活動を続けた。

作風は、当初は具象的な油彩画から始まり、徐々に抽象の度合を高め、1940年代には抽象画の傾向が強まり、戦前での前衛美術の先駆的役割を果たした。特にフォトグラムの技法を用いた作品群は「フォトデッサン」と呼ばれ、独自の技法として昇華させた。第二次世界大戦後は、1951(昭和26)年同志とデモクラート美術家協会の中心メンバーとして、多種多様な抽象的作品を残し、晩年には、エアー・ブラッシなどを使用して、『午後』ほか点描による抽象性の高い作品を発表した。

十三子姉 (1929)

油彩・板にキャンヴァス 60.7×49.9cm





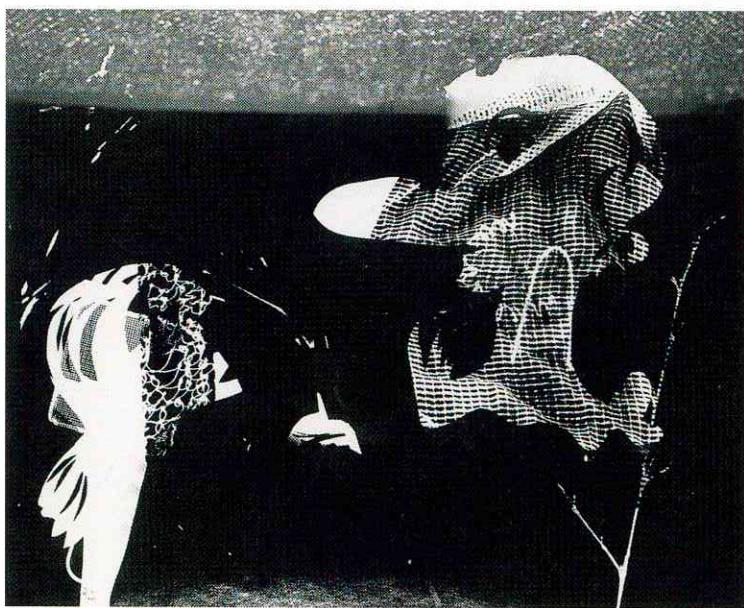
十三子姉像 (1939)

油彩・キャンヴァス 41.0×31.9cm



出発 (1949)

油彩・キャンヴァス 116.5×91.0cm



鼻高プロフィール (1950)

フォトデッサン 45.5×55.7cm

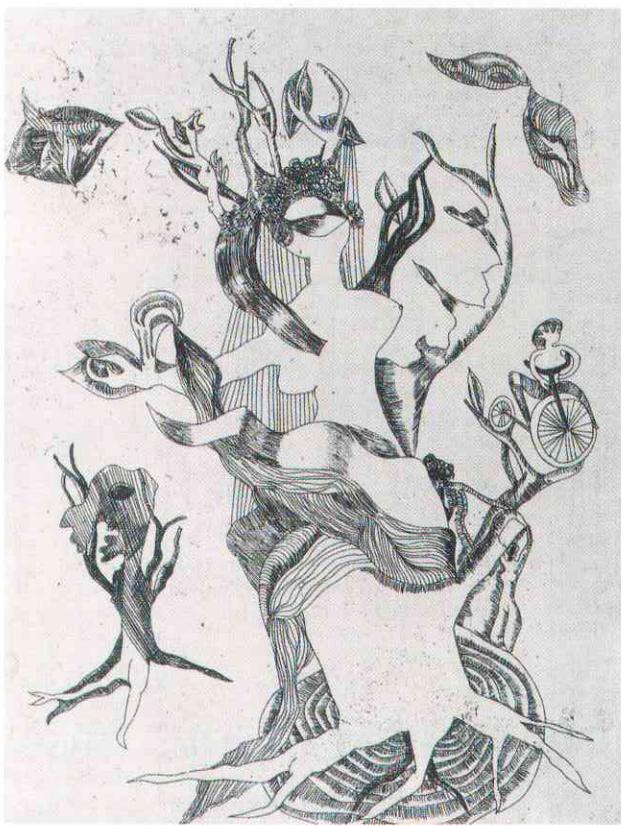


森のつどい (1951)

フォトデッサン 43.4×53.8cm

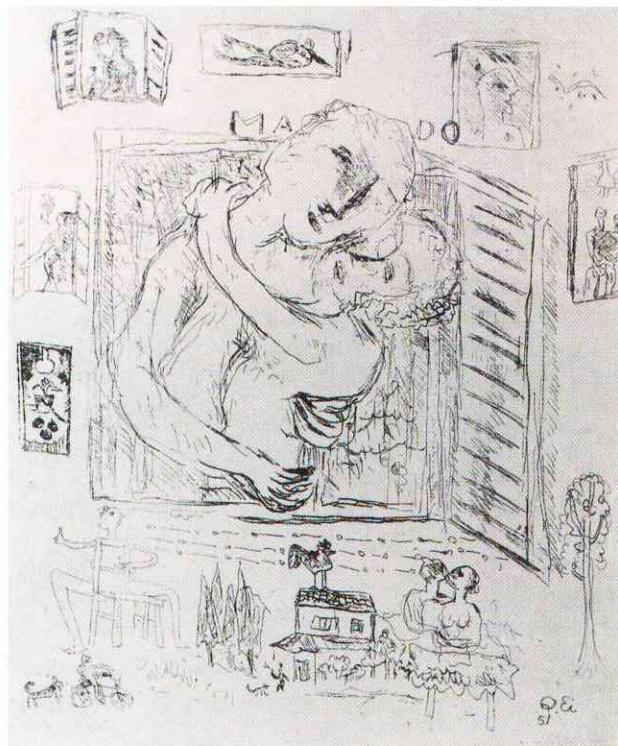
二人 (1951)

エッチング 14.7×12.2cm



枝 (1952)

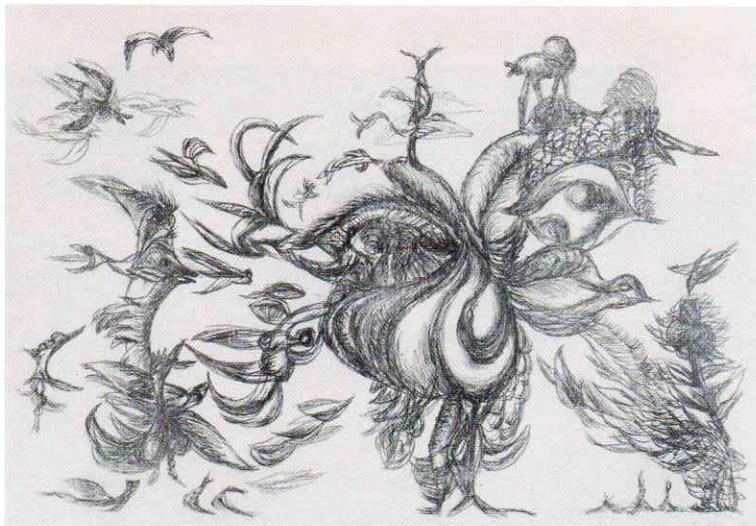
エッチング・アクアチント 23.5×18.0cm





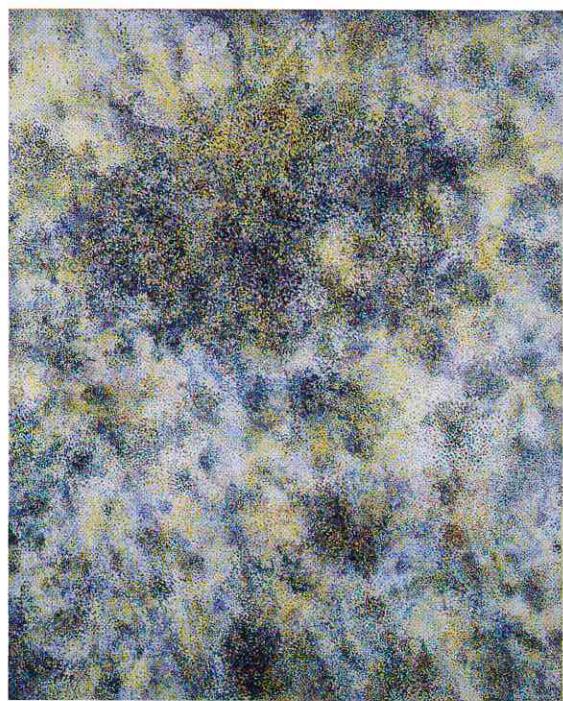
航海 (1956)

リトグラフ 41.0×54.3cm



嵐をつげる (1956)

リトグラフ 35.0×52.0cm



雲 (1959)

油彩・キャンヴァス 162.2×130.3cm

Ai-O

(1931-)

翫 嘴

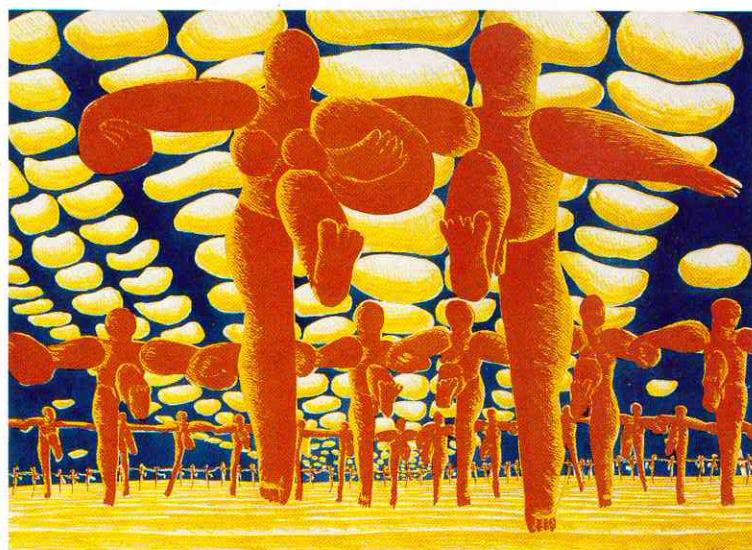
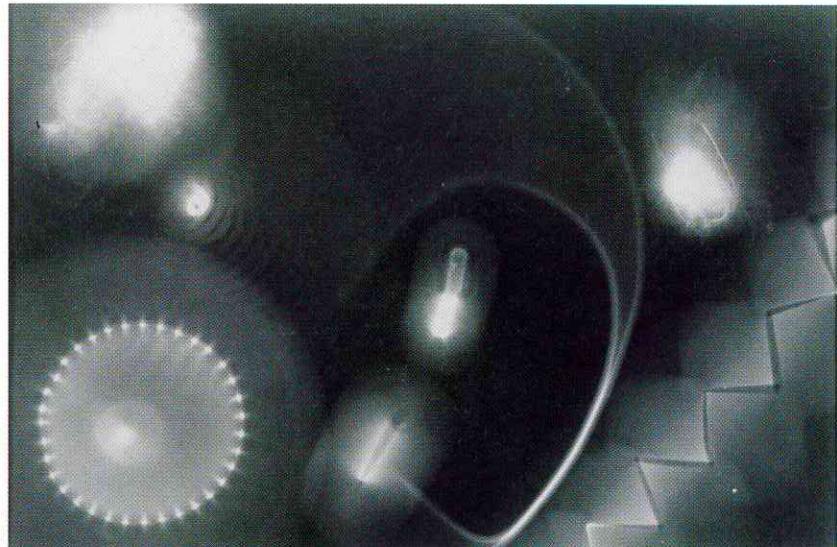
茨城県行方郡玉造町に生まれる。本名飯島孝雄。1954(昭和29)年東京教育大学芸術学科を卒業。在学中からデモクラート美術家協会展に出品、のち池田満寿夫らとグループ「実在者」を結成する。1958(昭和33)年からニューヨークに住み、フルクサス・グループに参加、1966(昭和41)年ベネチア・ビエンナーレ展に出品する。

この間に「虹の作家」として知られるようになる。1970(昭和45)年の東京国際版画ビエンナーレ展で東京国立近代美術館賞を受けたほか、海外での受賞も多い。

作風は、虹のスペクトル色彩による絵画や版画で知られ、1970(昭和45)年以降は東京とニューヨークに住む。

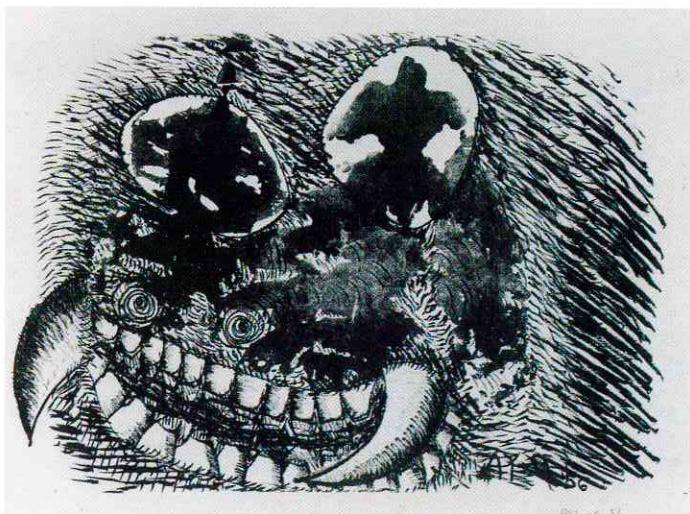
フォトグラム (c.1953)

ゼラチン・シルバー・プリント
15.0×22.5cm



田园 (1956)

リトグラフ 53.5×73.0cm

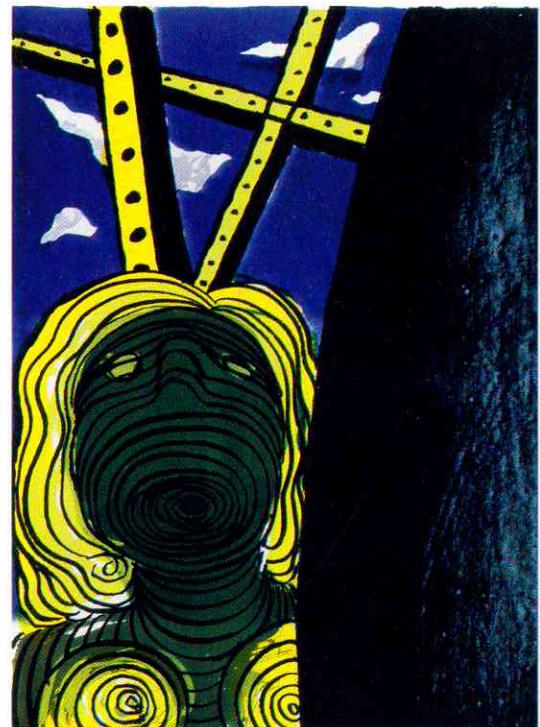


けもの (1956)

リトグラフ 29.5×41.5cm

鉄骨 (1957)

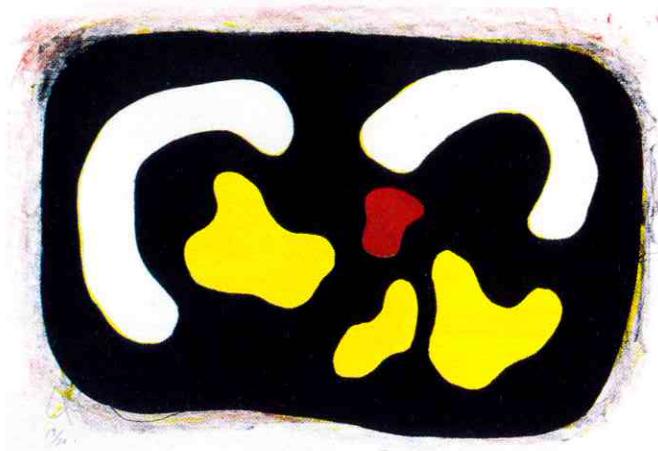
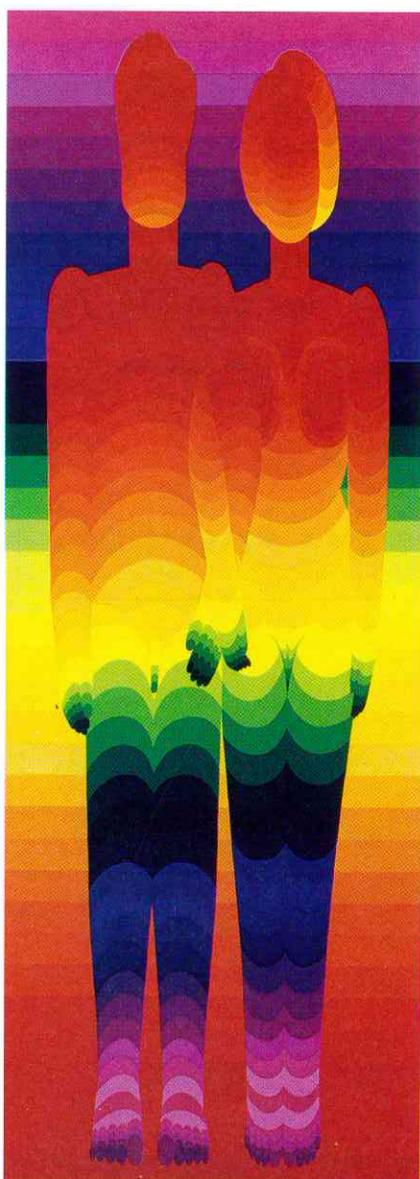
リトグラフ 54.0×40.5cm



鉄骨・ウインチ・2人 (1957)

リトグラフ 40.5×53.0cm





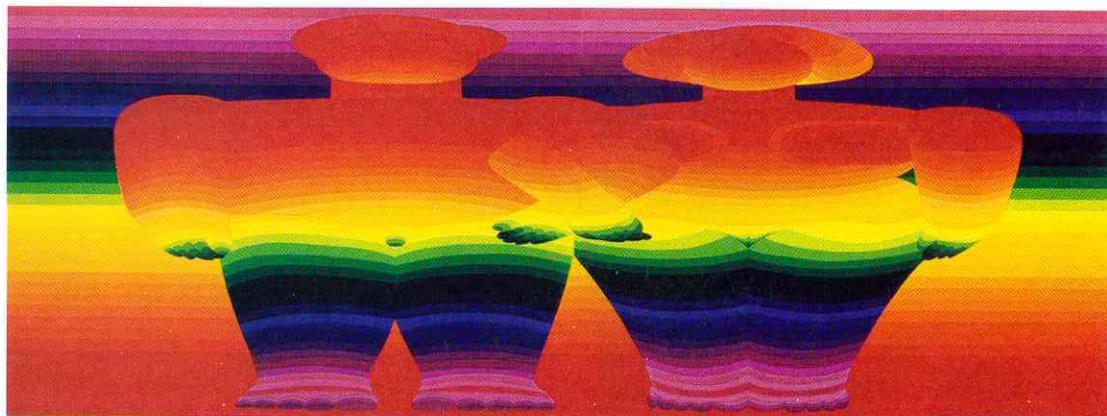
黒の中の白・黄・赤の形 (1957)

リトグラフ 29.0×43.5cm

Mr. & Miss Rainbow noppo V - R
(1973) セリグラフ 141.5×50.5cm

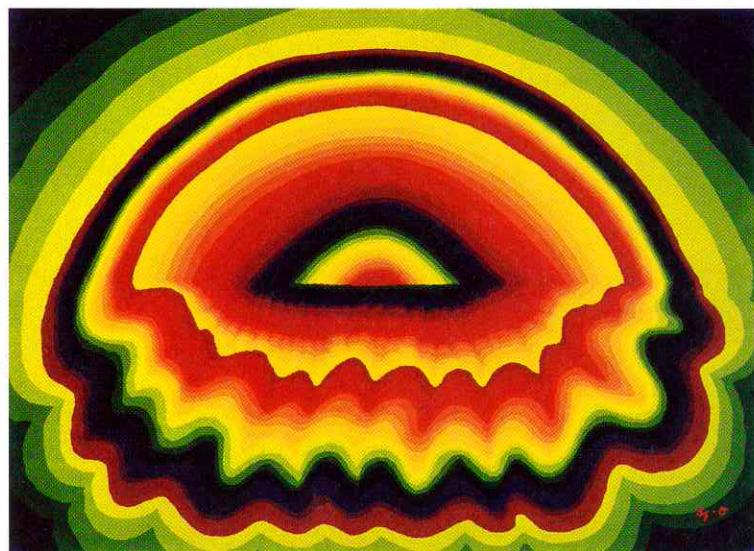
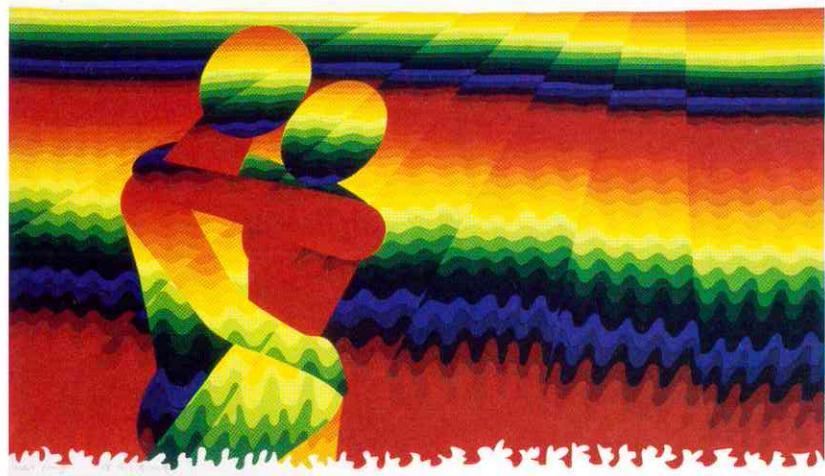
Mr. & Miss Rainbow debu V - R (1973)

セリグラフ 48.9×130.0cm



透明な波—スリランカ
(1981)

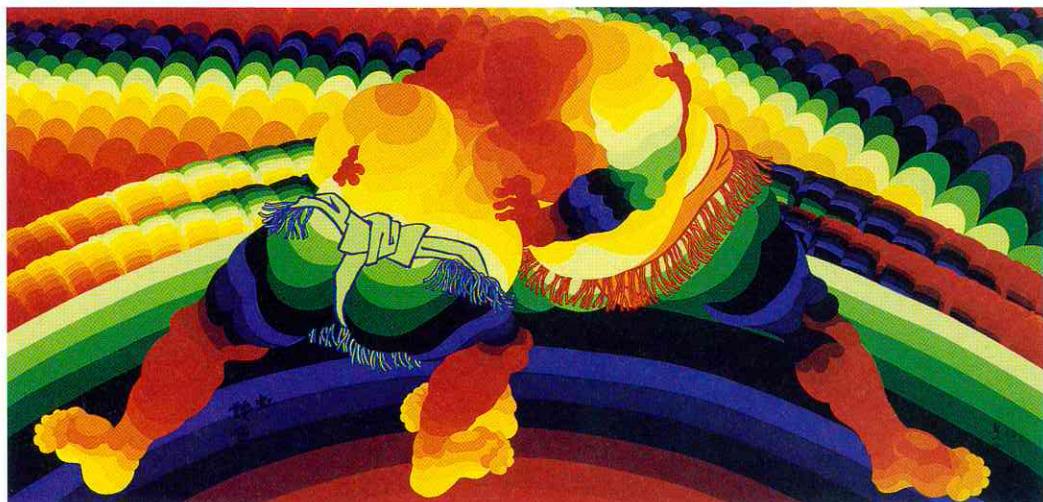
セリグラフ 76.2×135.2cm



タイム・トンネル (1981)

染織、タペストリー 180.0×240.0cm

角力 (1984) セリグラフ 40.0×82.5cm



Ikeda-Masuo
(1934-1997)

池田満寿夫

旧奉天市(現、中国瀋陽市)に生まれる。終戦で長野市に引き揚げ、高校卒業後画家を志して上京。1955(昭和30)年瑛九の勧めで銅版画を始め、1957(昭和32)年の第一回東京国際版画ビエンナーレ展以後出品を続け、文部大臣賞、東京都知事賞、国立近代美術館賞を受ける。エロチズムと風刺を詩的に昇華した独自の作風により、1966(昭和41)年ベネチア・ビエンナーレ展で国際版画大賞ほか海外での

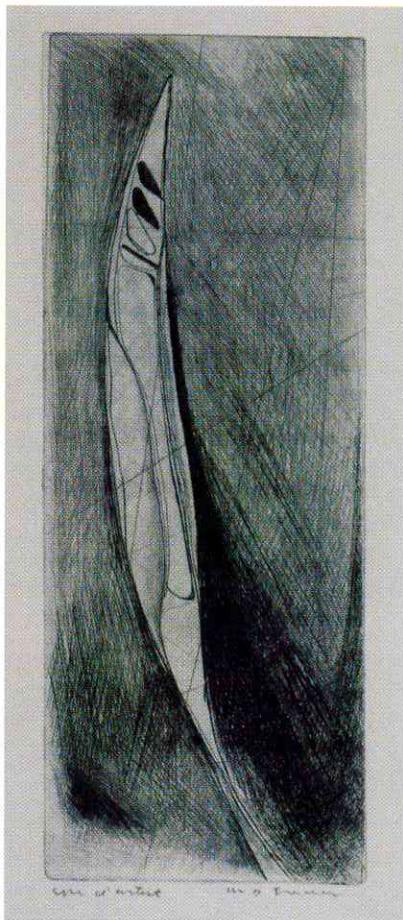
受賞も多数ある。欧米や日本で版画活動のほか、幅広い活動で知られ、1977(昭和52)年小説『エーゲ海に捧ぐ』が芥川賞を受け、翌年これを自ら監督して映画化した。その後陶芸作品の制作等でも活躍する。なお狭山市には、1986(昭和61)年初めての陶壁画として制作された『自然と都市 狹山』が狭山市役所1階エントランスホールに設置されている。

原始の太陽 (1956)

エッチング、アクアチント 12.2×18.1cm

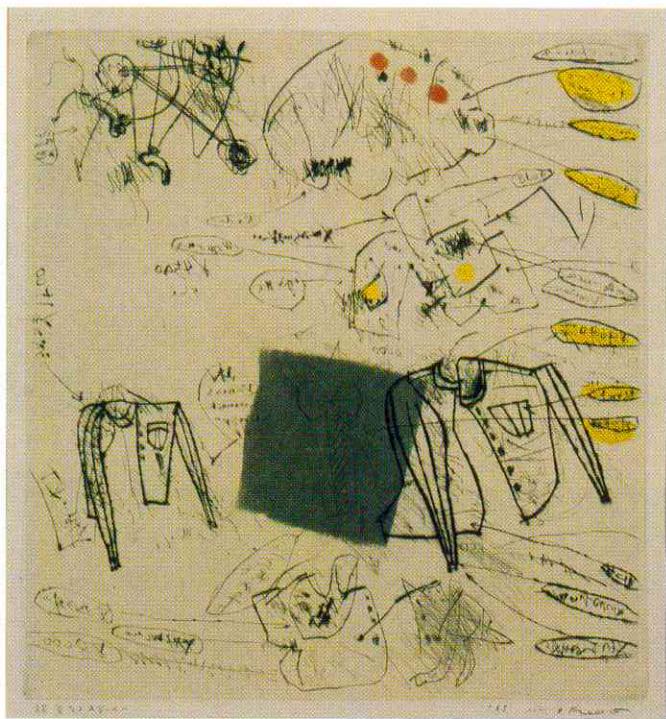


56 m ghecol



上方へ (1957)

ドライポイント 27.0×10.3cm



ぼくのもの・おまえのもの1 (1963)

ドライポイント、ルーレット 36.0×33.6cm



Something Again A (1966)

リトグラフ 67.5×52.1cm

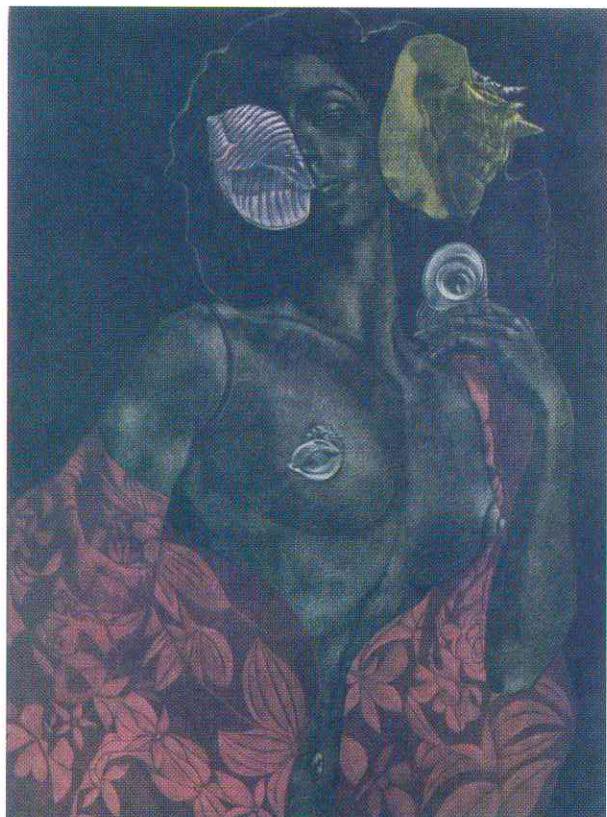
ヴィナス (1975)

メゾチント 29.6×39.9cm



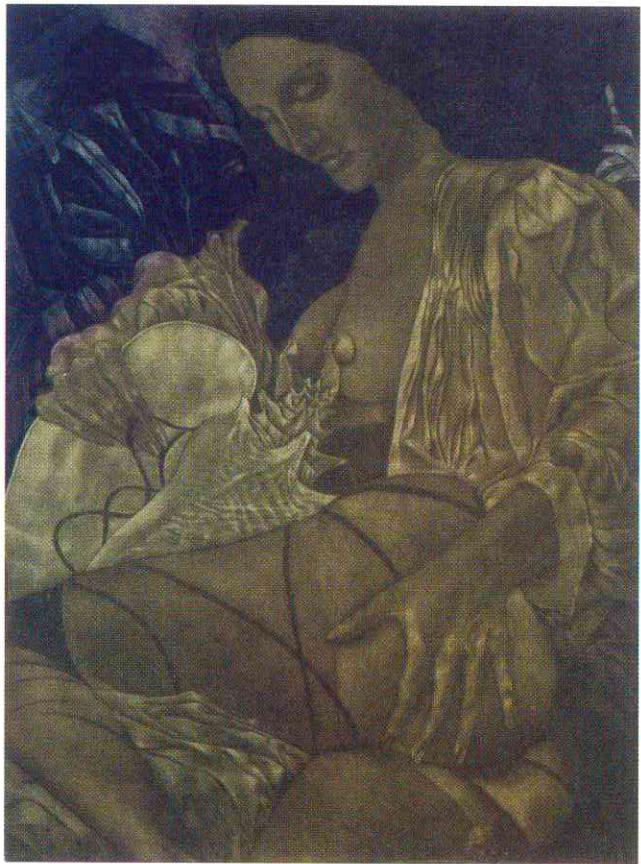
ブロンズ・ヴィナス (1975)

メゾチント 40.1×29.8cm



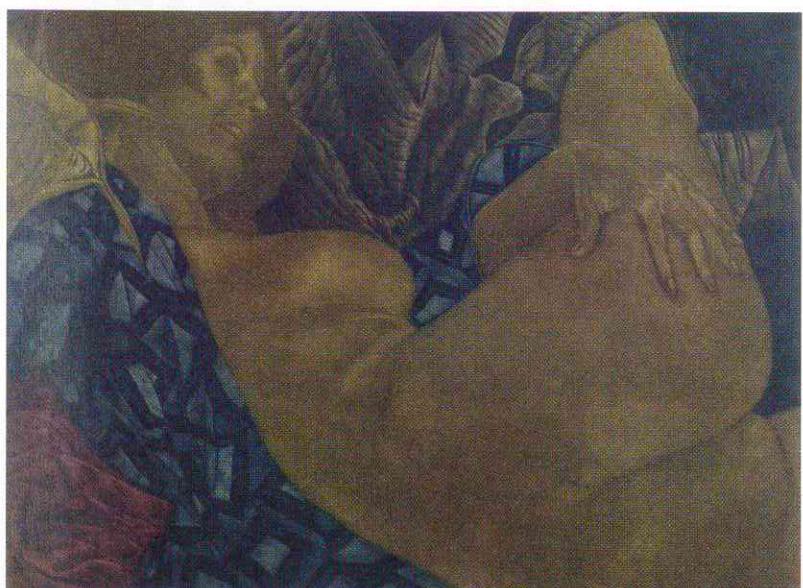
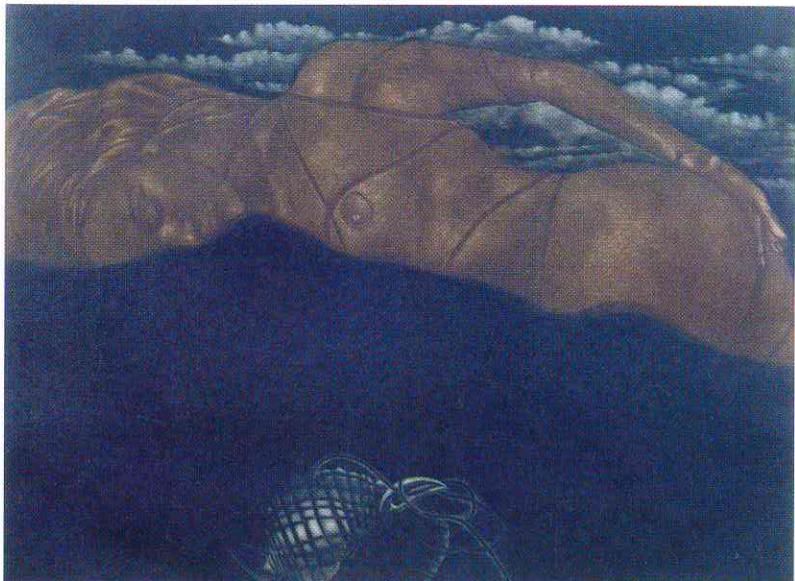
貝を持つヴィナス (1975)

メゾチント 40.1×29.8cm



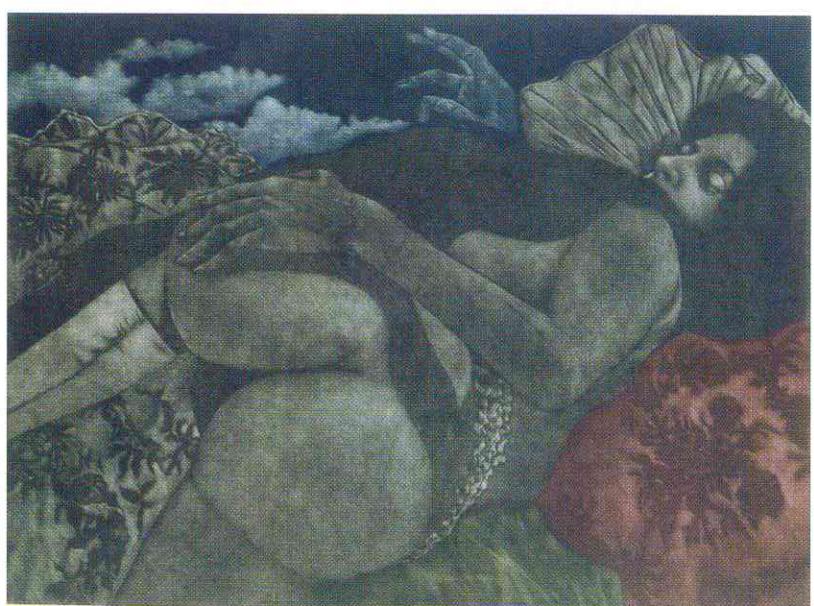
海辺のヴィナス (1975)

メゾチント 29.7×40.1cm



愛のあとヴィナス

(1975) メゾチント 29.6×39.7cm



ヴィナスの死 (1975)

メゾチント 29.7×40.0cm



【参考展示】

池田満寿夫 **自然と都市 狹山** (1986)

陶板・石・タイル・ステンレス

236.0×2,157.6 cm

236.0×2,574.4 cm

狹山市市制施行30周年記念事業のひとつであった狹山市庁舎に、21世紀をめざした狹山市の象徴として制作されたものです。「緑豊かな近代都市狹山に捧ぐ」という副題のとおり、豊かな自然と伸びゆく都市、そして快適居住空間をイメージ化し、陶板などの素材を生かして表現しています。

